



銀泥彩磁かいわれ文向付
(第8回現代茶陶展
TOKI織部大賞受賞作品
2015年)

教育学部
大学院人間社会科学研究科 教授

井戸川 豊
IDOGAWA YUTAKA

専門研究分野
陶芸表現、工芸教育、陶芸材料学



陶芸における伝統技術や原材料を探究し、表現の可能性を発信する。



青はコバルト、茶は鉄、白は長石と
いうように、陶磁器の彩色には鉱物由来の顔料を使う。磁器の焼成
温度は1250°C(陶器は磁器よりも
低く900°C~)。地球深部の高
圧・高温の環境下で生成された鉱
物だからこそ、焼成に耐えて鮮や
かな色で器を彩ることができる。

深く内包されています。このこと
を踏まえて、過去の陶芸技術と
原材料を調査・分析し、現代の視
点から捉え直して、装飾表現の
技法研究を行っています。

具体的には、伝統的な陶磁器
用の色絵具による描画法を土台として、新たに
金・銀・プラチナといった貴金属を組み合わせ
た描画法に焦点を当て、新たな表現技法を開発
しています。この技法の魅力は、陶磁器が持つ
清潔感と多彩な色彩とが織りなす美的効果に
あります。しかし、陶磁器は窯に入れて高温で
焼き上げることで完成する造形物なので、金・
銀・プラチナ・色絵具などの顔料それぞれの溶
解温度の違いや化学反応によって、窯の中で顔
料が器の表面から剥がれたり、色が消えてし

まったりする問題があります。また、理想の色が
でなかったり、窯の中で作品が割れてしまっ
たりして、苦労は絶えませんが、これらの問題を克
服するために、焼成に適した顔料の定着法の開
発に挑んでいます。

研究が達成すれば、陶磁器の質感に新たに
貴金属の高貴さと、彩り豊かな色絵具の組み合
わせによる斬新な色感の世界を構築するととも
に、独創的な装飾技法が確立され、陶磁器の表
現に新たな1ページを切り開くことになるで
しょう。そして、得られた成果は、陶芸作品とし
て社会に発信します。また、大学の工房では、教
員と学生が一緒に研究し、得られた知見を、講
義や実習を通して次の世代を担う学生たちへ
伝えることで、研究と教育が相乗効果を生むよ
うな取り組みを行っています。



(左)銀泥彩磁鉢
(第62回日本伝統工芸展
高松宮記念賞受賞作品
2015年)

(右)銀泥彩磁羽黒蜻蛉文鉢
(第66回日本伝統工芸展
入選作品 2019年)

美術は時代の変遷とともにその役割も
多様に変化してきました。その中に
あっても、歴史に裏づけられた伝統にもとづく
陶芸の技術や精神は、人間にとって最も身近に
ある芸術として常に生活の場で機能的にはたら
いてきました。原材料と伝統技術、そして作り
手の表現が密接に絡み合って制作される陶芸
作品は、人々の生活の中で輝きを放ち大きな感
動を与えるものです。

特に日本の陶芸には、長い制作の歴史があり、制作技術の進歩によって大きく発展してきました。それは、原土から焼成までの制作工程における表現の幅広さを物語っているといえます。古代人の祈りの装飾が縄文土器を生み出し、茶の湯といった日本独自の芸道文化が安土桃山の陶器を作り出しました。そして、先人たちのたゆまぬ努力が現代の多種多様な陶磁器へとつながってきました。このような陶芸の発展には、歳月の中で磨かれ、受け継がれた技法が

〈背景写真〉
井戸川教授の作陶に欠かせない「銀泥彩磁(ぎんでいさいじ)」に用いる銀粉。
銀泥彩磁は銀粉とフノリを混ぜて作る銀泥を磁器の全面に施す装飾技法だ。

附置研究所

原爆放射線医科学研究所

ゲノム科学などの最先端の基礎研究から、再生医療など高度な臨床展開に至るまで「放射線の人体影響」の総合的な研究を推進しています。被爆者の医療を半世紀にわたって行う一方、放射線災害・医科学領域の研究拠点として、全国の研究者・医師と活発な共同研究を進めています。



学内共同教育研究施設

- ナノデバイス・バイオ融合科学研究所
- 高等教育研究開発センター
- 情報メディア教育研究センター
- 自然科学研究支援開発センター
- 森戸国際高等教育学院
- 教育開発国際協力研究センター
- 保健管理センター
- 平和センター
- 環境安全センター
- 総合博物館
- 北京研究センター
- 宇宙科学センター
- 外国語教育研究センター
- 文書館